

編集・発行：滋賀大学経済経営研究所
〒522-8522 滋賀県彦根市馬場 1-1-1
滋賀大学彦根キャンパス
総合研究棟〈士魂商才館〉1 階
2021 年 2 月 1 日発行
<https://www.econ.shiga-u.ac.jp/ebrisk/>



企画展

はるかなる手紙

— 滋賀大学所蔵フランスの貴重自筆書簡 —

2020. 1.7 (Tue) ➡ 2021. 4.30 (Fri)

Clément Colson 第1期

クレマン・コルソン

1月7日 火 — 4月30日 木

Léon Say 第2期

レオン・セー 2021年

10月1日 木 — 1月29日 金

François Guizot 第3期

フランソワ・ギゾー

2月1日 月 — 4月30日 金

※新型コロナウイルス感染症拡大防止等により、中止・延期・変更となる場合があります。

企画展

はるかなる手紙

—滋賀大学所蔵フランスの貴重自筆書簡

第1期：Clément Colson クレマン・コルソン
■▶ 1月7日（火）～4月30日（木）

第2期：Léon Say レオン・セー^{2021年}
■▶ 10月1日（木）～1月29日（金）

✓ 第3期：François Guizot フランソワ・ギゾー
■▶ 2月1日（月）～4月30日（金）



ごあいさつ

今回の展示では、滋賀大学が所蔵する、フランスの3人の歴史的人物の自筆書簡を3期にわたって紹介します。これらの書簡はいずれも、偶然のめぐり合わせで滋賀大学にやってきたものです。

第1期に展示するのは、経済学者コルソン（Clément Colson, 1853-1939）による1923年付の書簡2通です。コルソンは、学者としてだけでなく高級官僚としても華々しい活躍をした人です。

第2期に展示するのは、経済学者レオン・セー（Léon Say, 1826-1896）の1883年付の書簡です。セーもまた財務大臣を3度つとめ、日本銀行の設立にも大きな影響力を及ぼしました。

第3期に展示するのは、著名な歴史家で、首相としても名を馳せたギゾー（François Pierre Guillaume Guizot, 1787-1874）の1833年付の書簡です。

本展示では、書簡の内容だけでなく、歴史的背景や、舞台となったパリの雰囲気もお伝えし、皆さんをはるかなる場所と時間の旅に誘います。

2020年1月

監修：御崎 加代子（ミサキ カヨコ）

滋賀大学経済学部教授（専門分野はワルラスを中心とする経済学史、フランス経済思想史）

参考文献：

御崎 加代子（資料紹介）「滋賀大学図書館所蔵 Clément Colson (1853-1939) の書簡について」『彦根論叢』第380号、滋賀大学経済学会、2009、89-99.

御崎 加代子（資料紹介）「滋賀大学図書館所蔵 Léon Say から Alfred de Foville への書簡(1883)」『彦根論叢』第412号、滋賀大学経済学会、2017、68-71.

御崎 加代子（資料紹介）「滋賀大学図書館所蔵 François Guizot の自筆書簡（1833）について」『滋賀大学経済学部研究年報』Vol.25、滋賀大学経済学部、2018、123-126.

企画展関連年表

1787年 フランソワ・ギゾー生まれる。

1789年 フランス革命始まる。

1799年 ナポレオン・ボナパルトがクーデターを起こし、統領政府を樹立。

1804年 ナポレオンが皇帝の地位につき、第一帝政始まる。

1814年 ナポレオン退位し、エルバ島に流される。翌年ルイ18世が王位につく。

1826年 レオン・セー生まれる。

1830年 七月革命。オルレアン家ルイ＝フィリップが即位。七月王政が成立。

1832年 ギゾー公教育大臣に就任（37年まで）。

1833年 ギゾーからカトルメルへの書簡（第3期展示）

1848年 二月革命。ルイ＝フィリップ追放。ギゾー亡命。第二共和政成立。

1851年 ルイ＝ナポレオン・ボナパルトのクーデター。

1852年 ルイ＝ナポレオン・ボナパルトがナポレオン3世として皇帝の地位につく。
第二帝政成立。翌年よりセーヌ県知事オスマンによる「パリ改造」始まる。

1853年 クレマン・コルソン生まれる。

1870年 普仏戦争始まる。翌年、フランス敗退し、ナポレオン3世失脚。

1871年 パリで民衆蜂起。パリ＝コミューン宣言。コミューン鎮圧後、第三共和政成立。

1872年 レオン・セー財務大臣に就任（73年まで）。

1874年 フランソワ・ギゾー死去。

1875年 レオン・セー財務大臣に就任（79年まで）。

1883年 レオン・セーからド・フォヴィルへの書簡（第2期展示）

1887年 エッフェル塔の建設が始まる。89年一般公開。

1889年 レオン・セー財務大臣に就任。

1896年 レオン・セー死去。

1897年 ドレフュス事件始まる。

1914年 第一次世界大戦勃発。ドイツと開戦。

1918年 休戦条約。

1919年 パリ講和会議。

1923年 クレマン・コルソン、国務院の副院長に就任（28年まで）

1923年 コルソンからピネへの書簡（第1期展示）

1923年 ルール占領始まる。（25年まで）

1939年 クレマン・コルソン死去。

1939年 第二次世界大戦勃発。ドイツに宣戦布告。



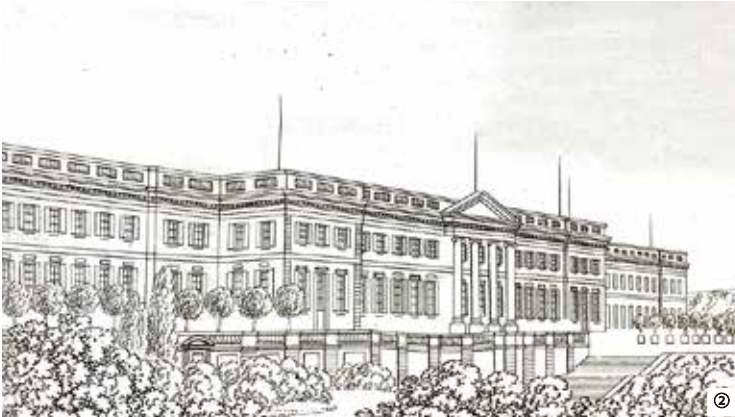


La Liberté guidant le peuple (民衆を導く自由の女神) 1830 年 / Ferdinand Victor Eugène Delacroix / ルーヴル美術館蔵
ドラクロワ (Ferdinand Victor Eugène Delacroix, 1798-1863) は、フランスの 19 世紀ロマン主義を代表する画家です。
La Liberté guidant le peuple (民衆を導く自由の女神) は、1830 年に起きたフランス七月革命を主題に描かれました。
本企画展「はるかなる手紙」の舞台は、1830 年代、1880 年代、1920 年代のパリです。

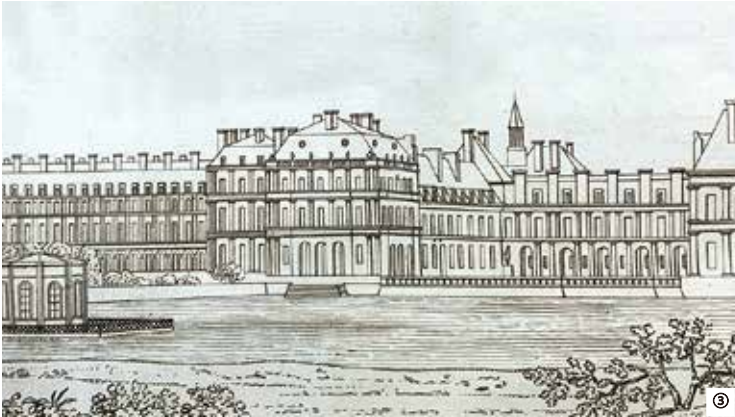


①

①1826年のパリの地図
②Château de Compiègne.(コンピエーニュ城)
③Château de Fontainebleau.(フォンテーヌブロー宮殿)
④Hermitage de J.J. Roufseau.(ジャン＝ジャック・ルソーの庵)
Manuel du voyageur aux environs de Paris, ou Tableau Actuel des Environs de cette Capitale,
M.Isidore de Paty, Paris: Roret, 1826



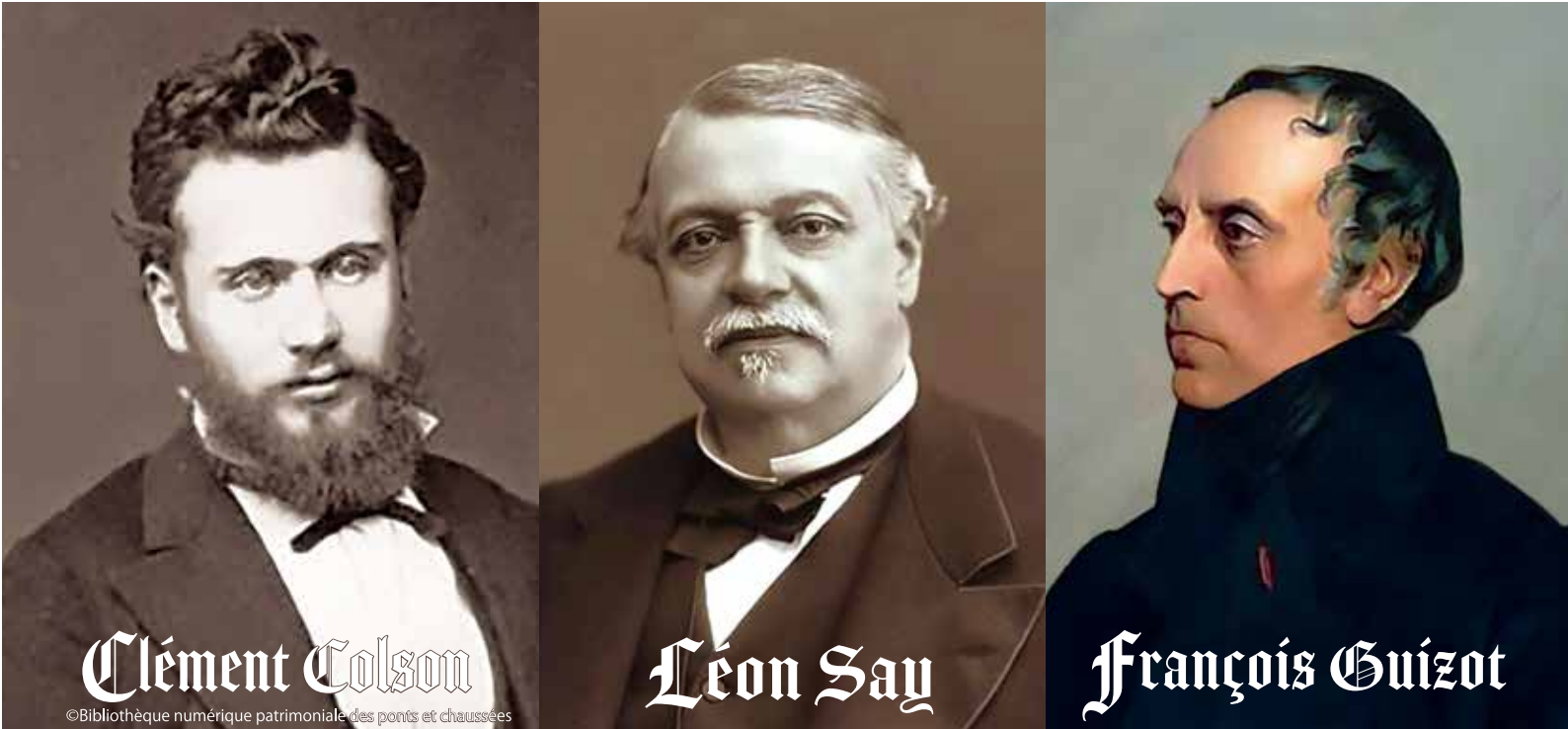
②



③



④



第 1 期 : クレマン・コルソン (1853-1939)

クレマン・コルソンは、19 世紀末から 20 世紀にかけて、フランスで活躍したエンジニア・エコノミストの代表格である。「エンジニア・エコノミスト」とは、フランスの近代化の過程において公共事業にたずさわった高級官僚であり、職業上の必要性から経済理論の発展にも多大なる貢献をした。

コルソンは経済学者として、交通経済学の先駆けとして、またフランスで最初に国民所得の算定を行った人物として有名である。彼は経済学の教育・普及においても活躍し、同時に官僚として輝かしいキャリアを築きあげた稀有な人物である。2007 年度に滋賀大学図書館が購入した、彼の代表作『経済学講義』(全 6 巻)のうちの第 1 巻『経済現象の一般的理論』(1907)の中に挟まれていた手書きの書簡 2 通は、コルソンが官僚としてのキャリアの最高峰、國務院の副院長を務めていた頃に書かれたものである。

第 2 期 : レオン・セー (1826-1896)

レオン・セーは、フランスの自由主義経済学者、実業家、政治家であり、「セー法則」で有名な経済学者 J. B. セー (Jean Baptiste Say, 1767-1832) の孫にあたる。レオン・セーは、フランスの財務大臣を 3 回務め (1872-73 年、1875-79 年、1889 年)、日本の明治政府ともゆかりのある人物として知られる。日本銀行の創設者である松方正義が 1870 年代ヨーロッパ滞在中に、当時の財務大臣レオン・セーから強い影響を受けたのである。

滋賀大学附属図書館は、レオン・セーの著書『フランスの財政―1881 年 12 月 15 日から 1882 年 12 月 20 日までの 1 年間の議論』を所蔵している。この本には、著者のレオン・セーが、有名な統計学者アルフレッド・ド・フォヴィル (Alfred de Villé, 1842-1913) に宛てた自筆書簡がそえられており、その内容から判断して、本書は、セーがド・フォヴィルに献呈した本であった可能性が高い。

第 3 期 : フランソワ・ギゾー (1787-1874)

ギゾーは、19 世紀前半に活躍したフランスの著名な政治家、歴史家である。

滋賀大学図書館は 2018 年 2 月に、ギゾーの代表作『ヨーロッパ文明史：ローマ帝国の崩壊からフランス革命まで』の英訳版 (1839) を購入した。その本には、1833 年 8 月 13 日付のギゾーの自筆書簡が添付されていた。

ギゾーはフランスの七月王政期、1832 年から 1837 年まで公教育大臣の職にあり、数々の教育改革に携わった。この書簡が書かれた約二か月前、1833 年 6 月 23 日には、有名な初等教育法案「ギゾー法」が成立している。この書簡も公教育省の便せんが使われ、肩書も「公教育大臣」となっている。書簡の内容は、神学部のヘブライ語教育に関するものである。

1820-1830 Paris

TITLE
はるかなる手紙 滋賀大学附属フランスの貴重自筆書簡
1st. Clément Colson 2nd. Léon Say  3rd. François Guizot

1820-1830s Paris

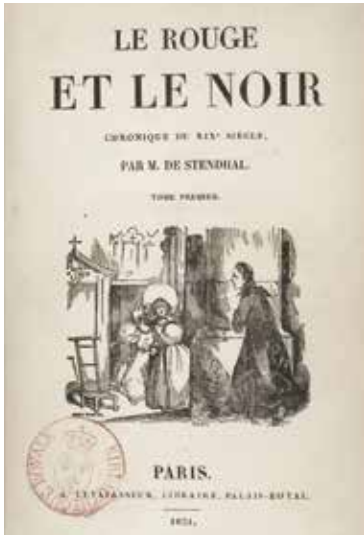
1820年代から1830年代のフランスは、社会の構造や人々の価値観が激しく変化した時代である。政治的には、1815年のナポレオン失脚後の、ブルボン王朝による王政復古から、新興階級であるブルジョワジーに基盤をおく七月王政（1830年）へと体制が大きく転換した時期であり、経済的には、イギリスに遅れて産業革命が急速に発展した時期である。これに伴い、民衆の窮乏化など、様々な社会問題が顕在化した。1789年に始まったフランス大革命によって封建制度はすでに崩壊していたが、新しい産業社会にふさわしい秩序がまだ確立していなかったため、経済発展が社会的混乱を引き起こしていた。大都市パリは、農村から流入する人口の急増によって、貧困やスラム化などの都市問題が深刻化し、民衆をとりまく環境は悪化していた。

1830年に刊行されたスタンダール (Stendhal, 1783-1842) の小説『赤と黒』は、七月革命前夜の王政復古下の社会を描いた小説である。当時実際に起きた事件をもとに、地方出身の青年ジュリアン・ソレルの立身出世の野望と恋愛、断頭台で処刑されるまでの短い生涯がテーマである。特に侯爵家令嬢のマチルドとの恋を描いた第2部は、当時のパリの上流社会の様子を詳細に伝えている。スタンダールはこの作品で、王政復古下の腐敗した聖職者や貴族階級を批判的に描こうとした。ちなみにスタンダールは、1830年の七月革命後、知事になることをもくろんで当時の内務大臣ギゾーに会ったが、願いはかなえられなかった。

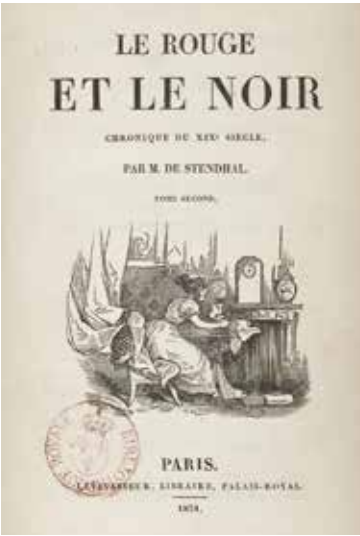
また1862年に刊行されたユゴー (Victor Hugo, 1802-1885) の長編小説『レ・ミゼラブル (Les Misérables)』は、1815年から1833年までの激動のフランス社会を背景に、一切れのパンを盗んだために投獄された、ジャン＝バルジャンの波乱に満ちた生涯がテーマである。小説では、当時のパリの底辺で生きる民衆の状況が赤裸々に描かれている。



エミール・バヤール (Émile Bayard, 1837-1891) が描いた『レ・ミゼラブル』の挿絵
1823年、ジャン＝バルジャンがコゼットを迎えに行った場面
/Victor Huga, Les Misérables,1862



スタンダール『赤と黒』第1部（左）と第2部（右）
/STENDHAL, Le Rouge et le Noir,1831



ギゾー (1787-1874) の生涯

フランソワ・ギゾー (François Pierre Guillaume Guizot, 1787-1874) は、19世紀前半に活躍したフランスの歴史家、政治家である。ギゾーは、1787年、フランス大革命勃発直前、南仏ニームに生まれたが、1794年、プロテスタントの弁護士であった父親が、恐怖政治のもとで死刑に処せられた後は、母親と共にジュネーブに移った。

1805年、ギゾーはパリに出て法律と文学を修め、1812年にはソルボンヌ大学で近代史の専任教授に任命された。ナポレオンが失脚し、王政が復古すると、官界入りを果たし、司法省、内務省の要職に就いて、1817年の選挙法、1819年の出版法の準備で重要な役割を演じた。1820年、自由主義的なドカズ内閣が崩壊すると、ギゾーはソルボンヌ大学に復帰し、多くの聴講者を集めたが、1822年に反動的なヴィレール内閣を批判したため、大学を追われた。1828年に穏健なマルティニャック内閣が成立すると、ギゾーは再び教壇に戻る。この時のギゾーの講義録が、代表作『ヨーロッパ文明史』(1828)である。

1830年の七月革命の際に、ギゾーは、新王ルイ・フィリップの勝利に貢献し、1830年代に内務大臣、公教育大臣を歴任した。ギゾーが公教育大臣として取り組んだ初等教育改革案は「ギゾー法」として有名であるが、今回展示する書簡は、その「ギゾー法」が成立した1833年当時に執筆されたものである。

自由主義的な論客として人気を博したギゾーであったが、1830年代以降は、政治家として保守的傾向を強めてゆく。1840年代には駐英大使を経て、外務大臣、そして首相を務め、二月革命(1848)まで政権の中心を占めたが、この間、ギゾーは自由派の要求を無視し、選挙法の改正に反対し、財産による制限選挙を固守した。そのため1848年の二月革命と七月王政の崩壊をまねくことになった。

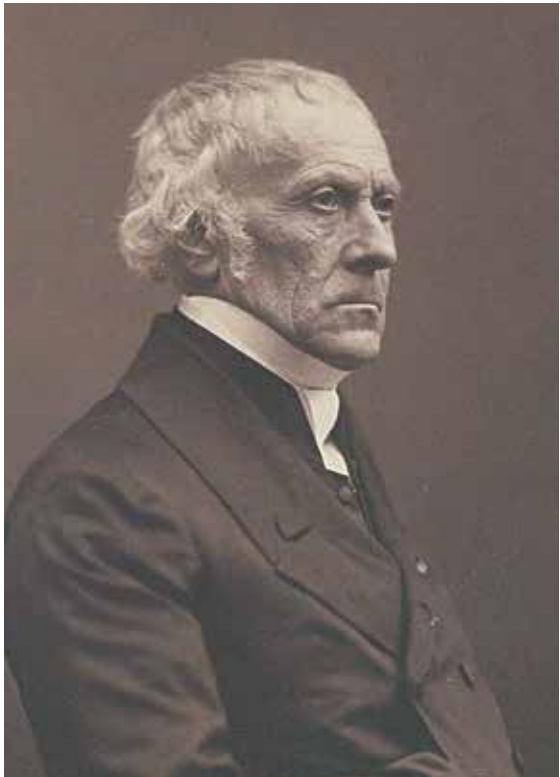
二月革命後、一年間のイギリスでの亡命生活を経て、ギゾーは、フランスに帰国したが、もはや政治家として活躍することはなく、歴史研究と著述に余生を捧げた。

1833年8月13日付 書簡の背景

今回展示するのは、ギゾーがフランスの公教育大臣であった1833年当時の自筆書簡である。滋賀大学附属図書館は、2018年1月に、ギゾーの代表作『ヨーロッパ文明史：ローマ帝国の崩壊からフランス革命まで』の英訳版(1839)を購入した。その書籍に添付されていたのが本書簡である。

ギゾーはフランスの七月王政期、1832年から1837年まで公教育大臣の職にあり、数々の教育改革に携わった。この書簡が書かれた約二か月前、1833年6月には、有名な初等教育法案「ギゾー法」が成立している。この書簡には公教育省の便せんが使われ、肩書も「公教育大臣」となっている。

ギゾーがこの書簡を宛てた相手は、便箋の一番下に記されている「学士院会員 エティエンヌ・カトルメール」である。書簡の冒頭の「同僚・同業者 (confrère)」という表現は、アカデミー会員の間で特に用いられる。1815年、東洋学者エティエンヌ・カトルメール(1781-1857)は、フランス学士院を構成する「碑文アカデミー (l'Académie des inscriptions)」の会員になっており、ギゾーも1811年にこのアカデミーに加わっていた。カトルメールは、1819年にコレージュ・ド・フランス (Collège de France) のヘブライ語教授の地位に就き、その分野での第一人者であった。本書簡の内容とその極めて礼儀正しい文体から、ギゾーは、カトルメールに対して並々ならぬ敬意を払っていることがうかがえる。
なおギゾーは1836年4月に、学士院を構成する「アカデミー・フランセーズ (フランス翰林院)」の会員にも選ばれ、本書簡のサインがギゾー本人のものであることは、同機関のサイトで確認できる。



写真家ナダール (Nadar, 1820-1910) が撮影したギゾー
1854-1870年頃 / フランス国立図書館蔵



オーギュスタン・フランソワ・ルメートル (Augustin-François Lemaître,1797-1870) が描いた、パリの学士院図書館 / Dictionnaire de l'Académie française Tome second.,1835

TITLE
はるかなる手紙
国文学研究資料館フランスの貴重図書部蔵
1st. Clément Colson
2nd. Léon Say
3rd. François Guizot

七月王政とは？

ギゾーは、七月王政時に国政を担った政治家である。七月王政は、1830 年 7 月、ナポレオン没落後のブルボン王朝が担っていた復古王政を崩壊させた市民革命、七月革命によって成立した。

七月革命が起きた 7 月 27 日から 29 日までの 3 日間は、「栄光の 3 日間」と呼ばれる。パリで蜂起したブルジョワジーと民衆は、多くの犠牲者を出したが、7 月 31 日、オルレアン家のルイ＝フィリップが、民衆の歓呼をうけて国王として即位した。それまで政権を握っていたシャルル 10 世と王家は亡命し、再びフランスに戻ることはなかった。また聖職者たちも身の危険にさらされた。

新しく権力を握ったのは、自由派のブルジョワジーであった。「市民王」と呼ばれた新しい国王はブルボン正統主義を否定し、王室費も減額されたが、復古王政時と同様に制限選挙制は引き継がれ、民衆は政治から排除された。

1830 年代前半は、リヨンの絹織物労働者の二度にわたる反乱をはじめ、労働者による騒乱が頻発したが、政府は軍隊を動員して厳しく弾圧した。言論、出版、結社に対する統制が強化され、反体制運動は抑圧されて、上層ブルジョワジーの支配体制が確立した。1839 年には、経済不況を背景にパリで暴動が起こり、選挙権拡大運動が各地で高まりをみせた。このような状況の下、国王は 1840 年に、ギゾーに組閣を命じた。

ギゾーは、国王の支持のもと、1847 年 9 月までは外務大臣、その後は首相として政局を担当した。彼は、銀行資本の利益を図る一方、選挙権拡大を含む自由主義的な改革を頑なに拒否し続けた。1846 年、47 年の経済恐慌は、ギゾー政府に対する中小のブルジョワジー、労働者、農民の不満をいっそう激化さた。それに伴い選挙法改正運動が高まりをみせたが、ギゾー内閣がこれを禁圧し、それが引き金となって、1848 年、二月革命が勃発、七月王政は崩壊することになった。



Louis-Philippe Ier, roi des Français (1773-1850)
(ルイ・フィリップ、フランスの王 (1773-1850)) 1841 年
/ Franz Xaver Winterhalter (フランツ・ヴィンターハルター) / ベルサイユ宮殿美術館蔵



Combat devant l'Hôtel de Ville le 28 juillet 1830
(1830 年 7 月 28 日パリ市庁舎前での戦い) 1833 年
/ Jean-Victor Schnetz (ジャン＝ヴィクトール・シュネッツ) / プティ・パレ美術館蔵



RUE TRANSNONAIN, LE 15 AVRIL 1834 (トランスノナン街、1834 年 4 月 15 日)
/ L'Association mensuelle, juillet 1834

ドーミエ (Honoré Daumier, 1808-1879) のリトグラフ「トランスノナン街、1834 年 4 月 15 日」は、前日にパリで起こった民衆運動にかかわる虐殺を伝えるものである

「ギゾー法」(1833) とは？

ギゾーは、七月王政の公教育大臣として、数々の教育改革に携わったが、中でも 1833 年に成立した「ギゾー法 (loi Guizot)」が有名である。この法律は、人口 500 人以上の各市町村に小学校を開設することを義務づけ、教員の待遇の改善を図るとともに、各県に師範学校の設立を定めるものであった。さらに 1836 年以降は、女子を対象とする小学校の開設の義務が定められ、6 歳以下の子供を預かる保育所の開設も奨励された。

この法律により、小学校のない市町村の数は、1829 年の 14,000 (全市町村の 3 分の 1) から 1837 年には、5,600 まで減少した。この法律は無償の義務教育を命じるものではなかったので、初等教育の普及は限定的なものであったが、それでも文盲率の低下にはある程度貢献したとされる。なお小学校の無償化と義務化を確立したのは、1881-82 年のフェリー法である。



ドーミエ (Honoré Daumier, 1808-1879) による風刺画
傲慢と墮落で肥大化し、居眠りする閣僚を描いている
LE VENTRE LÉGISLATIF. Aspect des bancs ministériel de la chambre improstituée de 1834.
(立法府の腹 1834 年の金では買えん議会の、大臣席の眺め) / L'Association mensuelle, janvier 1834

コンドルセ著『人間精神の進歩に関する歴史的展望の素描』(1795)

フランスにおいて近代的な公教育制度を最初に立案したのは、18 世紀に活躍した啓蒙思想家コンドルセ (Condorcet, Marie-Jean-Antoine Nicolas de Caritat, 1743-1794) である。コンドルセの業績は多岐にわたり、数学者（特に確率論）、黒人奴隷の解放論の先駆者、当時の財務総監チユルゴの経済改革の協力者などとしても知られる。

コンドルセは、1791 年パリから立法議会に選出され、公教育委員会の議長となった。1792 年議会に報告した「革命議会における教育計画」において、国民教育の第一の目的が市民の間の政治的平等の実現にあること、公教育が政府の当然の義務であることを示した。同年、コンドルセは、国民公会議員に選ばれ、憲法草案を提出したが、採択されないまま政治的抗争の激化に巻き込まれた。1794 年 3 月 29 日、8 か月に及ぶ逃亡生活ののち逮捕され、牢獄で死体となって発見された。

コンドルセの代表的著作『人間精神進歩の歴史』(1795) は、この逃亡期間中に執筆された遺稿である。コンドルセは、この中で、理性、科学、技術、社会、人間の無限進歩を確信し、未来の進歩を確保するものとして、歴史法則の必然性ではなく、教育と政治的改革と道徳的形成に期待をしていた。



François Pierre Guillaume Guizot
(フランソワ・ピエール・ギヨーム・ギゾー) 1833 年
/ Honoré Daumier (オノレ・ドーミエ) / オルセー美術館蔵



Marie-Jean-Antoine-Nicolas Caritat, marquis de Condorcet (1743-1794)
(マリー・ジャン・アントワヌ・ニコラカリタ、コンドルセ侯爵 (1743-1794))
/1789-1794 年頃 / 作者不明 / ベルサイユ宮殿美術館蔵

